

●一般社団法人 CSV 開発機構 近江氏

こんにちは。

近江と申します。

15分という時間でいろんなことをお話ししなければいけないので、資料を読み込めるような形で厚めに用意しておりますので、ここではかいづまんご説明をしていこうかなと思います。

今日お集まりの皆さんとのラインナップを見ますと、私よりも制度に関しては詳しい人たちばかりなので、その辺はバンバン飛ばしながらいこうかなと思っています。逆に、どちらかというと今ネイチャーポジティブへの取組というのがボランタリーなところで続いているので、県内企業さんの持っているノウハウをどうやって引っ張り上げていくかというところを中心にお話ししていかねばなと思っています。

2回目のテーマとしては、仲間を増やしていきましょうというところに主眼を置きながらやっています。

7月にネイチャーポジティブ経済移行戦略ロードマップが発表されましたけれども、やはりポイントは、このネイチャーポジティブと経済という言葉がくつづいたところだと思います。今までのいわゆる環境対策としてのネイチャーポジティブのところに経済・社会というレイヤーを重ね合わせて、そこに経済が乗ってくるとお金をどういうふうに回していくか、技術力とかノウハウをどう回していくかというところが見えてくるかと思うんですね。また、ここ最近はエネルギーのことを言っていることが多いのですが、エネルギーをどう回していくかというところも経済のところに入ってきます。そこにさらに、暮らしやすい、住み続けたい埼玉を作るためにどうするかという、社会、人とか町とかコミュニティーという、地域資源の捉え方というのが出てくる。ここをレイヤーにして、議論を整理していくうのをちょっと心がけたらしいんじやないかなと。今まででは保全とか守るとかというところと環境の軸で、企業だとCSRの視点とかでネイチャーポジティブを捉えてきたのだと思うんですけれども、ここから先は自社のノウハウとか技術とかをそこにどういうふうに生かせるかで、それをどうビジネスにしていけるかということを考えていかなきやいけない。ですので、我々CSVに話が来たのだと思うんですけれども、自社のビジネスをどうそのサプライチェーンの中に位置付けて、ビジネスにしながら社会貢献していくかというようなところがふやすとかいかすとかというところの縦の軸になってくるのだと思いますね。この辺を色々とキーワードちりばめていますけれども、これだけで多分3時間ぐらい話せてしまうので、この辺に関しては僕はあると思うんですけれども、とにかくレイヤーにきちんと整理をして議論のフォーカスをしていきましょうというのがこの趣旨になります。

それからアクションの進め方で2つ柱があるよねというところで、1つはもう既に取り組まれているもの。1回目でもお話しさせていただきましたけれども、埼玉県って海がないんですけれども、川が色々とあったりとか、それからため池があつたりとか、水系の上に埼玉県はできているんですね。そこで色々なことを、もう既に飯能の方でホタル飛ばしている人がいたりとか。僕も実は大手町、都心のど真ん中でホタルを育ててそれを飛ばしたりということを、都市の緑の中でやるというのをやっていたんです。そういう既存の取組にどう繋がっていく形で膨らませていくかという線が1つと、それから新たに増やして、ネイチャーポジティブ経済を増やしていくところで、それぞれのエリアでどんなことができるかということを考えていきましょうというのが2つ目です。

そうするとネイチャーポジティブ経済の取組というのが、実際に環境への取組として効果があるかどうかというところと、経済としての回っていくサプライチェーンの最適化に繋がっていくかどうかというところと、埼玉県に暮らしやすい、埼玉県のスローガンとして「日本一暮らしやすい埼玉の実現」というのがありますから、その中でネイチャーポジティブ経済の中で、どういうことが実現できるかなというのを考えていくと。それからここで本気で官民連携をやっているじやないかというのが多分この場だと思いますので。色々な形でその具体的なアクションを起こしていくために、どういうふうに企業として絡んでいくのがいいのかということを今日ヒントとして、皆さん、何か得ていっていただけるといいんじゃないかなと思っています。

前回のときにも割ともうTNFDに取り組もうという企業さんもいらっしゃいましたし、もう実際にやってらっしゃるところが結構今日のメンバーの中にもいらっしゃるので、TNFDとは何ぞやというところはあまりやらないんですけれども。いわゆる中小企業にとっては大企業がやつ

ている TNFD へのアプローチに自分ところの技術をどう組み込ませていくかというのを検討していくという考え方があると思っているんですね。今日はそこをちょっと紐解いていこうかなと思っているところです。ですので、大企業がやる TNFD への LEAP アプローチに、中小企業としてどうやって参入していこうかというアプローチで考えていくよ。

LEAP アプローチに関しては、よく知ってらっしゃる方のほうが多い気がするのであまり説明しません。いわゆる Scoping。最初に対象を定めて、それからそれについて調べていくという発見する Locate。それを今どういう状態なのかという診断する Evaluate というプロセスがあつて、それを評価して、実際にそれをアクションにつなげていくための準備をするという Leap アプローチの考え方というのがネイチャーポジティブの論点では整理されていますという感じです。

それで、実際にこの TNFD に取り組まれている某鉄道会社さんの公開情報を引っ張ってきてみました。○○発電所って書いてありますけれども、これ信濃川なんですが。と言っちゃうとどこの会社か分かってしまうんですけれども。発表されている現状の TNFD の提言書です。まず Prepare のところ、戦略と目標の設定というところで、どういう移行リスクがあるのか、それから物理的リスクがあるのかというところを分析しているんですね。

次に、それを改善につなげていく。信濃川のところにある水力発電があるんですが、その水力発電を所有して運用していることによってそこの水系に対してどういうリスクがあるか、それに対してどういうアクションを会社としてやっていくかというのが、このページです。ここ、赤く囲んでみたんですけども、魚道の改善とメンテナンスをやっていこうと。当然ダムの脇のところ、魚が上っていけなくなってしまうと、それが会社にとってのリスクになるだろうということできれいにこれをやっていこうと。今度は上ってくる魚の魚種にもこだわっていって、サケの稚魚の放流活動をやっていこうと。そういうことを場を作つて、協議会組織を作つてみんなで協議をしながら事を進めていこうということやつていて。そうすると、大手の会社がやつていて TNFD を見ると、そこにどういう課題設定してのかなというのがもう見えてくるわけですね。中小企業としてはそこにどういうふうに自社の事業をぶつけていくのかということを考えると、参入できる領域というのが見えてくるんじゃないかなと。そうすると、要素技術をどういうふうに提供していくかとか、その開発した技術とかノウハウをどういうふうに水平展開して、同じようにダムを持っているところ、会社さんとか鉄道会社とかというところに水平展開していくけるはずと。それで市場をどういうふうに広げていくかという検討ができるということになつていて。

それから、どういうふうに組み込んでいくかというところなんですけれども、単独で某鉄道会社さんがやつていてるわけではなくて、その周辺の水系を構成している住民の方々や周辺のステークホルダーと一緒に協議会組織を作つていくので、ここにまずアプローチをしていくというのが1手だろうと。そのため、そこに行くとまたそこで色々な議論がなされていて、今こんなことが課題なんですよという課題が見えてくると思うので、そこに具体的な提案をしていくという検討ができるということになっています。

具体的にどんなことをやつていてるかというページなんですねけれども、より先ほどの話が細かく書いてあるということですが、例えば魚道のメンテナンスのところを考えると、ここをより魚が上つてきやすくなるためにどうしたらしいのかというようなところは色々とノウハウをお持ちの皆さんのがいるわけです。そういう方が、例えば魚道整備の土木建築技術みたいなことを確立しているとか。それからメンテナンスは流木が詰まつたりとか結構大変だったりするので、これをどう簡単にしていくかとか、詰まつたものを浚渫したりとか、取つた後の流木をどういうふうに活用していくかみたいなところもひょっとすると、ビジネスになつたりするかもしれないです。そういうことをこの一連の魚道のメンテナンスのところに関わつてくるビジネスというのは絶対ぶら下がつていいんですね。それをノウハウ持つていてるところがどこかないかな、できれば県内ではないかなというふうに考えていくと、皆さんのコーディネートしていくべき相手というのが見えてくると思うんですね。サケの養殖技術なんかもそうですね。これを陸上養殖として稚魚を育てるみたいなことを今どこかでやつてていると思うんです。それがうまく回つていてるのか回つていないのかというところをちょっと追いかけてあげると、僕も北海道でウニとかの養殖をやつていてるんですが、何屋なんだって話なんんですけど、色々と技術にノウハウがあるんですね。そこに改善すべき点というのが見えてくるはずなので、ここをどうするかとか、それから今日はもうプロフェッショナルでいらっしゃいますけれども、水質浄化とか、

管理技術とかそれをモニタリングする技術とかというのがきちんと回っているのかどうかというのをちょっと見てあげると、大体きちんと回ってないので、入り込む余地が必ずありますということです。そうすると、既に先行している企業さんがやっている TNFD を読み解いてみると、皆さんのがコーディネートすべき技術とかノウハウとか企業さんとかが必ず見えてきますので、そんなふうに先行する大企業の取組というのを取り込んでいこうというのが、今日のお話ということになります。

ざっとですが、今日の資料をご説明させていただきました。